

びろっば

Vol.426 **1**

年頭所感

医療情報

小さなクリップで変える大きな未来

〈MitraClip[®]術〉

ファミリー高知活動報告

〈天狗と獅子とマラソンと〉

MVP受賞者発表

表紙の写真

左より、プロクターの倉敷中央病院 久保俊介先生、
近森病院 菅根、細田(MitraClip[®]術)

[詳しくはP.3]

75th
Anniversary
CHIKAMORI
1946~2021

近森病院 近森リハビリテーション病院 近森オルソリハビリテーション病院 からのお知らせ

2月11日(金)、2月23日(水)は通常診療を行います。

年頭所感

今までの発想にとらわれない 自己変革

～高知の地域医療を守る最後の砦になろう～

社会医療法人 近森会 理事長 近森 正幸

はじめに

2021年も新型コロナに始まり、夏以降、新型コロナの最大規模の第5波が全国的に波及し、秋から冬にかけてまるで神風が吹いたように急激に減少している。ワクチンの普及とともにマスクや手洗い、3密を避ける国民の新しい生活習慣の徹底、さらには新型コロナがうまく増殖ができず自ら死滅したのではないかとという研究もある。冬の到来とともに新しい変異株の流行などにより第6波が押し寄せてくることも考えられ、今年も医療機関として厳しい戦いが続くと考えている。

過去2年間の新型コロナの猛威で高知の医療にも大変な変化が起こっているが、地域医療を守る最後の砦として使命感を持って対応していきたい。

新型コロナへの対応

高知県の新型コロナに対する医療体制は、高知医療センターをはじめ多くの病院が協力して入院協力医療機関が整備されているが、そのほとんどは軽症から中等症対応の病床で重症患者の受入れ病床は極めて少なかった。高知県でもパンデミックになれば人工呼吸器やECMO(人工心肺装置)が必要な重症患者が増加するため、当院でもフェーズ3以上でSCU(脳卒中)病棟15床を中等症から重症対応のCU(コロナ)病棟7床に転換し、第3波以降、第5波まで通常の救命救急医療と並行して多くの重症患者の診療にあたってきた。

これまでの救急医療や集中治療のノウハウをいかし、感染症内科の石田正之部長を中心に医師同士のチーム医療、多職種とのチーム医療で良好な治療成績を出すとともに、感染性がなくなりリハビリが必要な場合は一般病棟への転棟や紹介元への転院を積極的に行った。限りある病棟機能を効率的に運営し、スムーズな重症患者の受入れと治療を行い、コロナに関しても最後の砦としての役割を十分に果たすことが出来た。



本当に必要な 救命救急医療への対応

近森病院は1964年6月の救急病院告示以来、半世紀以上にわたり「救急の近森」として救急患者の受け入れを行ってきた。その間、営々と医療の質を高め、2003年2月には地域医療支援病院に承認され、2011年5月には救命救急センターに指定されている。

5カ年計画で急性期の近森病院は338床から452床に増床、総合心療センターの急性期精神科病床60床を統合し512床になった。これにより今まで満床でお断りせざるを得なかった紹介や救急、さらには外来からの入院患者をスムーズに受け入れている。

2020年4月の診療報酬改定で急性期の基幹病院として在り続けるためには重症度、医療・看護必要度がさらに厳しくなり、重症の患者を数多く集め、早く治して、早く在宅へ帰すことが求められるようになった。そのため重症の救急、紹介の患者を今まで以上に積極的に受入れ、夜間や休日であっても手術や処置を迅速確実にを行い、たとえ高齢患者であっても栄養サポートやリハビリテーションで全身状態を速やかに改善している。

病気は治っても障害が残る場合は、近森リハビリテーション病院が脳卒中や脊髄損傷患者、近森オルソリハビリテーション病院が整形外科手術後の患者を積極的に受入れ、リハビリテーションを提供するばかりでなく、地域の病院や施設と連携し、可能な限り住み慣れた地域に帰って頂くよう頑張っている。

最後に

近森は今までの発想にとらわれず、自己変革を限りなく続け、成長してきたが、職員一丸となって「高知の地域医療を守る最後の砦になる」という使命感をもって常に変化し、今まで以上によりよい病院に変わり続け、県民、市民に頼られる病院になりたいと願っている。



小さなクリップ で変える 大きな未来



僧帽弁閉鎖不全症に対して
カテーテルで行う低侵襲治療

マイトラクリップ

MitraClip®術

(経皮的僧帽弁接合不全修復術)



近森病院 循環器内科
菅根 裕紀
すがね ひろき

心不全再入院率と死亡率低下を期待して

当院でも2021年10月からMitraClip®が施行可能になりました。

僧帽弁という心臓の弁がしっかりと閉鎖できずに逆流してしまう、僧帽弁閉鎖不全症に対する低侵襲カテーテル治療です。重症の僧帽弁閉鎖不全症をお持ちの方で、最大限の心不全治療を行っても改善が乏しい方が主な適応となります。全身麻酔は必要ですが、胸を開かずに治療を行うことができます。この手技により心不全再入院率の低下、死亡率の低下が期待できます。

これまで、重症の僧帽弁閉鎖不全症による心不全を繰り返していても、開胸手術が困難であり、外来と入院を行ったり来たりしている患者さんを数多く見てきました。このMitraClip®でそのような悪循環を断ち切ることが可能になるのではと期待しています。

術前術後の全身管理が重要

当院は初回症例から90歳代の患者さんで、Mitraclip®で僧帽弁閉鎖不全症を制御することができましたが、術前の心不全管理から、術後のリハビリもしっかり行う必要がありました。MitraClip®の手技はもちろん重要ですが、術前術後の全身管理をしっかり行うことの重要性を改めて認識しました。

ICUにおける循環器集中治療、安定期のリハビリテーションや退院後の支援を含めて、このMitraClip®の導入を期にさらなるレベルアップを行なっていければと思っています。

■出典

*1: Nkomo VT, et al. Burden of valvular heart diseases: a population-based study. Lancet. 2006;368:1005-11.
*2: 総務省統計局. 人口推計の結果の概要 令和2年4月報(令和元年11月確定値). Available from: <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202004.pdf>
(アクセス日:2020年4月28日)
*3: 第115回日本内科学会講演会 明治維新150年目の内科学~難治性疾患への挑戦~ 循環器領域におけるCatheter based therapyの現状より
引用文献:1) Nkomo VT, et al : Burden of valvular heart diseases : a population-based study. Lancet 368 : 1005-1011, 2006.
画像・動画提供:アボットジャパン合同会社



治療適応

外科的手術(弁置換術・形成術など)の危険性が高い、もしくは向いていないと判断された方

- 非常に高齢
- 免疫不全状態
- 心臓手術の既往がある
- 脆弱
- 心臓の動きが悪い
- 悪性腫瘍の合併がある
- 左心室そのものの障害で逆流の生じる機能性僧帽弁閉鎖不全症

など

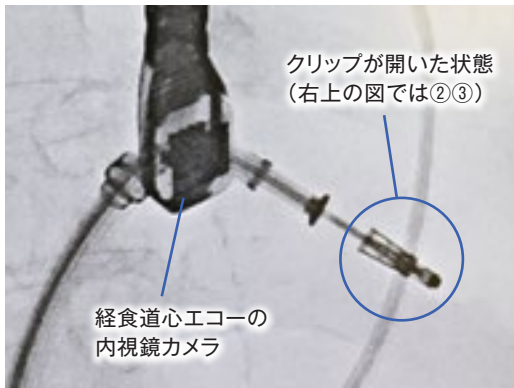
診療の流れ、注意点

僧帽弁閉鎖不全症が疑われる場合に、外来で経胸壁心エコー図検査、経食道心エコー図検査、負荷心エコー図検査などを行い、まず治療適応かどうかを診断します。

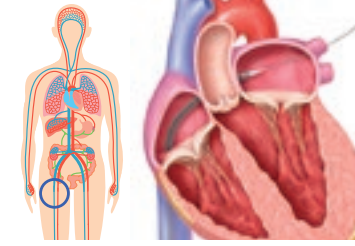
手術後は集中治療室で経過観察の後に、状態が落ち着けば一般病棟へ移ります。同時に元々の状態に応じてリハビリも開始します。

状態にもよりますが、ほとんどの方が1~2週間以内に退院可能です。その後は薬物療法や状態に応じてリハビリを行い、定期的な外来受診が続きますが、日常生活に戻られる方がほとんどです。

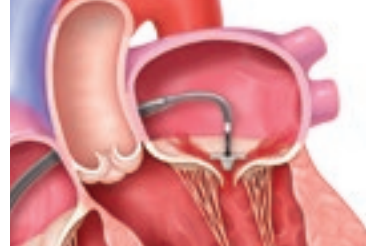
実際のモニタリング画像



① 鼠径部(太ももの付け根)の大静脈からカテーテルを通して、心臓の左心房に挿入。



② 僧帽弁に対して垂直にデバイス挿入させる。



③ 続いて左室へ進入し、弁尖をつまむようにしてクリッピング。



④ そのままデバイスは留置し、カテーテルを抜去。



⑤ 治療前は逆流していた血液が、クリッピングすることで軽減され心不全症状が緩和されます。



合併症やリスク

- 感染症、不整脈、脳梗塞など術後合併症の発生率(術後30日以内)は約15~19%です。
- 根本治療ではないため、外科手術に比べて逆流が多少残る可能性があります。
- 新しい治療のため長期的な成績はまだわかっていません。
- 僧帽弁の形態や逆流のメカニズムによっては、治療が困難なことがあります。
- 留置後、僧帽弁の閉鎖が完全に達成されず、別途治療の継続が必要になる可能性があります。



▲ 上から見た状態

◀ 心臓超音波装置を食道に挿入し、心臓超音波画像によるモニタリングでカテーテルの操作を行うため、全身麻酔下で行います。

▶ 【プロクター】
倉敷中央病院循環器内科
医長 久保俊介先生



講演会

近森会グループ看護部 QC報告会 (2021年11月27日)



QC活動の継続

近森病院 救命救急センター 放射線科
看護師長

増井 麻佳 ますい あさか

QC活動とは、品質管理(Quality Control)の頭文字で、病院で働くスタッフが「医療の質・安全・サービス向上」を目指し行う改善活動です。

今年度は10部署の報告があり、最優秀賞は「看護師から始めるACP」をテーマとして取り上げた北4病棟でした。その他、コロナ禍における3密を避ける取り組みや、面会制限下での家族看護、スキンケアの検討に関する報告などがありました。

QC活動は、QC活動で行ったことを継続し、モニタリングしていくことが大切です。継続することで看護の質向上に向けて看護師が考え取り組む組織になり、患者満足・職員満足に繋がると考えています。



受賞3賞

最優秀賞

- 部署名/北4
- チーム名/あなたの思いつなげ隊
- テーマ/看護師からはじめるACP
～患者の思いつなげよう～

優秀賞

- 部署名/6A ●チーム名/任せちよき★化学療法
- テーマ/がん化学療法の標準化とケアの質の向上を目指して

敢闘賞

- 部署名/スキンケア推進チーム ●チーム名/チームまでガイ
- テーマ/洗うことだけがケアじゃない!
～陰部洗浄のパラダイムシフト2021With HCU～



学会受賞

第91回 日本感染症学会
西日本地方会学術集会
第64回 日本感染症学会
中日本地方会学術集会
第69回 日本化学療法学会西日本支部総会
初期研修医セッション
優秀賞受賞



演題

治療に難渋した、ペニシリン耐性肺炎球菌
(PRSP)による脾摘後の細菌性髄膜炎の一例

自身で診た症例

初期研修医2年目 岡 真萌
おか まほ



この度は、荣誉ある賞を受賞させていただきありがとうございます。

自身で診させていただいた症例でしたので、思い出もあり本当に嬉しく思います。

発表当日の直前までご指導くださった石田先生、患者さんと一緒に診ていただきご指導くださった葛目先生をはじめ、呼吸器内科、脳神経内科の先生方、本当にありがとうございました。

まだまだ至らぬ点は多くございますが、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

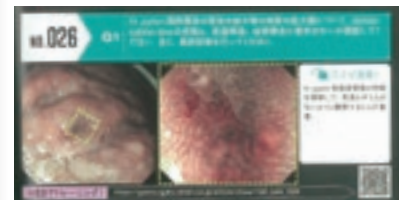
執筆掲載

『百症例式 胃の拡大内視鏡× 病理対比アトラス』

近森病院 消化器内科 北岡 真由子
科長 きたおか まゆこ



拡大内視鏡とは粘膜模様や血管を拡大観察できる内視鏡です。光の波長を変換する画像強調内視鏡と併用することで病変の良性・悪性の診断、早期がんの範囲診断を行うことができます。消化器内視鏡検査の専門書である『百症例式 胃の拡大内視鏡×病理対比アトラス』が医学書院より2021年10月に出版されました。拡大内視鏡はその画像から病理組織像を描くことが重要であり、本書は画像と病理を対比した専門書です。本書には当院の症例も含まれており、私も執筆者の一人として加えて頂きました。本書が内視鏡診断の一助になれば幸いです。このような企画に参加させて頂き、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。



PICC挿入 ～医師から特定行為研修修了 看護師へのタスクシフト～

近森病院 ICU病棟 看護師 池上 小也加 いけがみ さやか
下駄場 誠生 しもだば せいしょう

昨年度、外科術後病棟管理領域（以下、術後領域）パッケージの特定行為研修を2名が修了しました。術後領域の特徴は外科術後患者の管理に必要な知識と、技術的項目が多い点にあります。今まで医師の治療範囲とされていた処置が診療の補助範囲内で一部看護師が実践できるようになりました。

例として、輸液管理、人工呼吸器の調整、胸腔・腹腔ドレーンの抜去など様々な特定行為があり、中でもPICC挿入はエコーを用いた穿刺と清潔操作を行うため非常に緊張感のある処置になります。このエコーを用いた穿刺技術は日常の看護現場でも使うことができ、末梢採血や輸液ルートの確保が困難な場合に血管を確認しながら行うことで確実に穿刺することができます。そのため患者の苦痛とスタッフの負担の軽減に繋がります。

現在、特定看護師を対象にエコーガイド下で末梢穿刺が行えるよう指導を行っています。病棟で末梢穿刺やルート確保が困難な場合は、是非特定看護師へ気軽に声をかけて下さい。



感染防止対策 地域連携相互訪問

2021年10月28日

近森病院 感染対策室 副看護部長 近森 幹子
ちかもり みきこ



この相互訪問は、感染防止対策加算1を算定している病院同士が、感染対策実務者の視点で感染対策の実施状況の評価を行い、感染対策を向上させる目的で実施しています。

本年度は、細木病院の感染対策チーム4名（医師・看護師・臨床検査技師・薬剤師）をお迎えし当院の感染対策について評価をしていただきました。書面調査では、職種ごとに質問を受け意見交換をしました。また、現場視察では、ERへ搬送された患者さんの感染対応の手順を確認していただきました。SCU病棟は、既にコロナ病棟として運用していませんが、コロナ病棟として運用時のゾーニング方法や患者診療、看護をどのように実践したか説明し確認してもらいました。対応してくれた職員の皆さんありがとうございました。また、意見交換では、有熟者対応やコロナ病棟の感染対策等の話し合いを行い有意義な交流が生まれました。



医療安全対策 地域連携活動

Web会議実施日
2021年
10月27日
11月16・24・29日

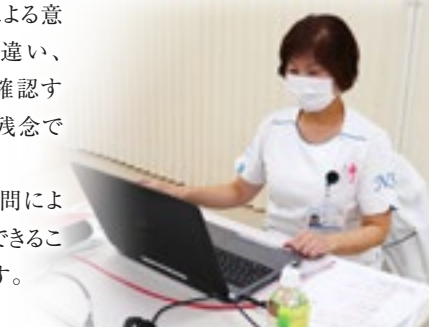


近森病院 医療安全管理部 看護師長 西岡 成巳
にしおか なるみ

医療安全管理部では医療安全対策の質向上を目的に、連携する施設間で訪問を行い、評価や意見交換を行っています。今年度はコロナ禍の状況を踏まえ施設間の訪問審査を控え、Web会議で意見交換会を開催することになりました。医療安全対策加算1を届け出している4病院（当院含む）の医療安全管理者と加算2の届け出病院4施設それぞれについて4日間に渡り状況確認や対策、評価をしました。今年度のテーマは『薬剤』で、各施設の現状や悩みを知る事、また他施設の管理者からのアドバイスや意見など聞くことができ、学ぶことの多い有意義な時間となりました。

しかし訪問による意見交換会とは違い、実際の場面を確認することができず残念でした。

来年度は訪問による審査が実現できることを願っています。



地域
連携
相互
訪問

ファミリー高知より



天狗と獅子になる 2021年11月3日

高知ハビリテーリングセンター センター長 西岡 由江 にしおか よしえ

春野町内ノ谷天満宮で、毎年恒例の秋祭りが行われました。少子高齢化がここでも大きな問題となっており、自治会長さんより「神輿担ぎを助けてくれないか」との連絡が入り、スタッフ5名で手伝いに行きました。神輿を先導する天狗と獅子をさせていただき無事にお祭りが終了しました。地区の皆さんから「ほんと、助かった」「これでハビリも内ノ谷の住人入りや!」とのお言葉をいただきました。



きたほんまちマラソン2021 2021年10月10日

しごと・生活サポートセンターウェーブ センター長 沼慶子 ぬまけいこ

そもそも『北本町をわが町に』というウェブのゆるい目標を立てたのがきっかけで、まずは北本町1丁目から4丁目までの気になるお店や作業につながりそうな企業、社会資源などを皆で探すところから始めました。その後、コロナ禍でどう活動しようかと考えていた時に「一周走る?」という冗談っぽい会話から、勝手に企画し名付けた『きたほんまちマラソン』が実現しました。

1周約4kmを全コース走ると走れる距離をたすきでつなぎ走る人とで構成し、職員と参加希望の利用者を募り、実施しました。当日は天気も良く、予定通り10時半からスタートし、11時半過ぎには皆で無事ゴール。北本町をわが町に…できたかどうかは微妙ですが、笑顔と勇気のたすきを最後までつなげた初マラソンは大成功だったように思います。



高知家健康パスポートアプリ 愛用しています

山と森と恵の会

去る10月に高知家健康パスポートアプリウォーキングイベント(参加者が1か月に1日1万歩を歩いた日数で競う)が開催されました。

7階までの移動はEVを使わず階段を使い何往復もする、家を早くでて出勤前に歩く、感染対策でラウンドし午前中だけで1万歩を超える、当直明けの日も1万歩歩いてから帰る、そんな4人でチームを組み、企業部門に参加してみました。

お互いに前日の歩数確認をして闘志を燃やし、雨の日もわざわざ帯屋町を徘徊したり、自宅内であらうろしたり、励ましあった結果、参加グループ中2位となりました。

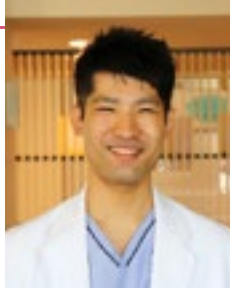
トラブルなく無事やり遂げられたことに安堵していたら、チーム全員が目標達成してもらえるスーパーごっくん24本、上位3チームへの血圧計に加え、さらに上位グループの中から抽選で5グループのみ貰える高知県産品詰合せ7000円相当も運よく頂きました。健康になりさらにご褒美も頂いた素敵なイベント参加となりました。次回2月も頑張りたいと思っています。



◀「山と森と恵の会」 近森リハビリテーション病院
左から 秋山朋子秘書、増田千恵シニア看護師長、中山衣代副院長、遠藤恵主任

コンテスト受賞

アイソカル®100レシピコンテスト
「審査員特別賞」受賞



アイソカル®100
栄養とカロリーがギュッと詰まった
コンパクト栄養補助食品

近森病院 臨床栄養部 管理栄養士 新井田 裕樹
にいだ ゆうき

コンテスト
142作品中で
ベスト4!



私は「分子調理学/法」に興味があり、研究会にも所属しています。さらに大学院博士課程にて分子生物学による基礎研究の経験と臨床栄養学の組み合わせにより今回のレシピを考案しました。「分子調理学/法」によりアイソカル®100にトロミが付き、食欲がない患者さんでもサッパリと食べやすいレシピになりました。



雑誌「ヘルスカフェ・レストラン」にレシピが掲載されました!

受賞レシピ

#夏バテとフレイルに
分子調理と
アイソカル®100を!!

フレdda ポモドーロ
アイソカル®100
そうめん



分量(1人前)

- 乾燥そうめん 1束(100g)
- トマト 1/3個
- ツナ缶 1/2缶
- 大葉 2枚
- A | 酢 大さじ1
- 砂糖 小さじ1/2
- 塩 適量
- オリーブオイル 小さじ1
- B | アイソカル®100 コーンスープ味 1パック(100ml)
- めんつゆ(2倍濃縮) 小さじ1
- 味噌 小さじ1/2
- 酢 大さじ1

作り方(所要時間:約10分)

- ① トマトを1cm角に切ります。大葉は1枚を千切りにし、もう1枚はみじん切りにします。ツナ缶は油を切ります。
- ② ポウチにトマトと大葉のみじん切り、ツナ缶、(A)を混ぜておきます。
- ③ (B)を混ぜておきます。
- ④ 鍋で沸騰させたお湯に乾燥そうめんをいれ、商品の説明通りに茹でて流水で洗い、水を切ります。
- ⑤ 皿にそうめんを盛り、(B)と②、大葉の千切りをのせて完成です。

● 食べ方のポイント

始めはソースと麺だけで食べ、その後は具材を全体に混ぜるとさらにサッパリと頂けます。

● 分子調理法のポイント

酢を加えたことによるpH低下がアイソカル®100に含まれるカゼインたんぱく質の等電点に近づくことで、たんぱく質が凝固しとろみがつきます。そのことでアイソカル®100が麺に絡まりやすくなり、アイソカル®100を余すことなく頂けます。とろみ剤を用いずにとろみがつくので、素麺や上の具材等を刻みにし、混ぜれば嚥下食として応用できる可能性もあります。

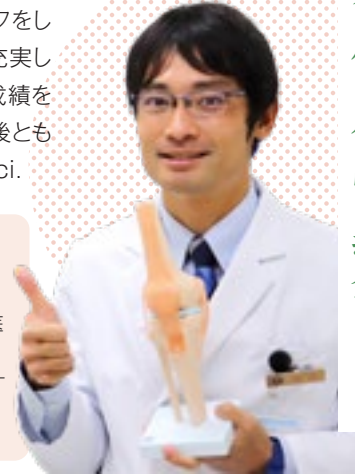
Point!

熱烈応援 昇格人事

Tres bien 近森病院

近森病院 整形外科 科長 岡崎 良紀 おかざき よしき

Bonjour! 私は、2年前にフランスへ留学しておりました。フランス人医師はオンとオフの切り替えがうまく、働き方改革の1つのモデルと考えられました。私は、勤務時には診療と手術の質を上げようと努力しておりますが、オフの日はサーフィンやゴルフをしてリフレッシュしております。充実したオンとオフが、優れた臨床成績をもたらすと信じております。今後ともよろしくおねがいします。Merci.



【出身大学】

香川大学、岡山大学大学院

【認定資格】

日本整形外科学会・整形外科専門医
日本整形外科学会・認定スポーツ医
日本スポーツ協会 公認スポーツドクター

【主な領域】

膝疾患、スポーツ障害

ハッスル研修医

常に学び続ける姿勢を大切に

初期研修医1年目 濱田 雄一郎 はまだ ゆういちろう

こんにちは。研修医1年目の濱田雄一郎です。高知で生まれ、高知で育ち、高知で働き、高知25年目になりました。

入職し、外科、内科、麻酔科など様々な科で研修させていただき、それぞれの科で沢山のことを経験させていただきました。この8ヶ月間は、医療人として、一社会人として未熟な部分が多々あり、反省続きの毎日だったように思います。これまでの反省を生かしこれからの研修医生活も有意義なものにしたいと思っています。

研修生活では指導医の先生やコメディカルの方々が僕たち研修医に対し、多くのことを教えてくださいました。自分の業務があるにも関わらず、僕たちに時間を割いてもらっている以上、一生懸命努力し、成長することで恩返しが出来ればと思っています。

めまぐるしく変化していく医療現場において、目の前で起こること全てに何かしら学ぶ要素があるのではないかと思います。常にアンテナを張り、学び続ける姿勢を大切にしたいと思っています。



近森会グループで元気に働く仲間を紹介します



MVP受賞者には
記念のバッジが
贈呈されました。

2021年度

近森会グループ

MVP

受賞者発表!



12月10日、今年度のMVP受賞者が発表されました。
昨年に続き今回も忘年会はありませんでしたが、授賞式が晴れやかに
行われました。受賞の皆さん、おめでとうございます。



近森病院
救命救急センター(ER)

根岸 正敏
町田 清史 他一同

救急患者の受入れに際し、常に新型コロナ
を意識した感染対策と抗原検査を行
い、病院内へウイルスが入りこまないよう
水際対策を行う重責を担った。



個人
受賞

画像診断部
診療放射線技師
谷脇 貴博

画像診断部の新人教育管理
マニュアルの見直しや有給休
暇運用管理システムを作成さ
れ、更にはCT撮影や画像再
構成のマニュアル作成にも多
数携わり、業務の効率化に大
きく貢献した。



チーム
受賞

近森オルソ
リハビリテーション
病院

安田 幸美
松本 圭司

新型コロナの影響でオルソ稼
働率が低下する中、重要となる
ワクチン接種を入院患者、職
員、職員家族まで早急を実施
できるよう綿密なスケジュール
を組み、1本の無駄もなく調整
を完了した。



感染制御部

石田 正之
近森 幹子
前野 多希
桜木 陽子

昨年来から新型コロナ感染症対策の舵を取り
続け、院内外の感染防止及び陽性患者の適切
な受入れを行い、当院のみならず地域医療への
貢献度は極めて大きい。



CU病棟

永野 智恵
山脇 寛子
他一同

新型コロナ患者の入院受入れ準備・
訓練から実際の受入れをICTや院内
各部署と連携し対応してくれた。個人
防護具を装着する等、感染対策を行
いながらの治療、看護の実践をした。





チーム
受賞

総務課

林 夕起 藤本 希美 尾崎 佐和
山本 友里 近森 絵令 丁野 志彦
山村 純子 中脇 英孝 田村 達彦 久保 菜月

今年度、産休、育休者の情報サイトを開設。4月新入職員情報や年末調整をWeb収集に変更し、自らの業務の効率化はもちろん、職員も利用しやすい申請方法を提案し、自らの行動で成果を出した。

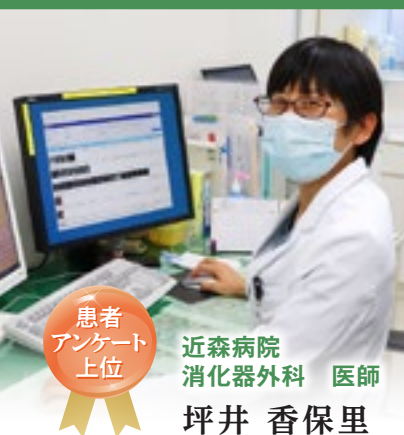


チーム
受賞

高知ハビリテリングセンター 感染対策委員会

大上 美幸 中山 彩香 田村 亨介 吉野 竜二
中井 有里 坂上 博子 中内 海人

新型コロナウイルス感染症の脅威の中、障害特性の問題も踏まえ、素早いBCP策定とシミュレーションを実施し、一人の感染者も出さずサービスが継続できた。



患者
アンケート
上位

近森病院
消化器外科 医師
坪井 香保里

「丁寧にわかりやすく説明して下さった」「初診から信頼と安心があり不安なくオペに臨むことができた」など、細かい配慮や優しく親身な対応に感謝の声が多くあった。



患者
アンケート
上位

近森病院
北館5・6階病棟
看護師
守屋 芹華

「ハキハキして心地よかった、細かいことにも気を配っていた」「とても丁寧に声をかけていただいて感謝しかありません」など、患者の気持ちに寄り添った看護に感謝の声が多くあった。



患者
アンケート
上位

近森病院6C病棟
看護師
辻 啓子

「挨拶、声かけが良くできて明るい、気遣いを感じる」「抗がん剤の点滴をしていただいたらとても上手で、細かくアドバイスもしてくれた」など、的確な患者対応に感謝の声が多くあった。



患者
アンケート
上位

近森病院7A病棟
看護師
小松 真依

「夜中でも、他の高齢の患者に対しても、とても丁寧に対応していて感心した」「辛い気持ちに寄り添い、安心させてくださった」など、日々の対応に感謝の声が多くあった。



患者
アンケート
上位

近森病院
リハビリテーション部
理学療法士
和田 詩織

「はっきり伝えてくれるので、安心してついていこうと思った」「常に患者の気持ちを考え、明るく前へ前へと前進させてくれた」など、日々の対応に感謝の声が多くあった。



患者
アンケート
上位

近森病院8A病棟
アテンダント
中岡 和子

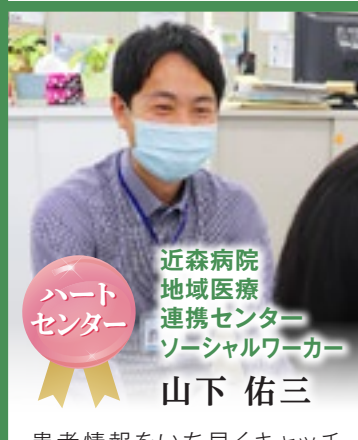
「細やかな気配りや声掛けがとても嬉しかった」「忙しい中でも、いつも笑顔で対応してくれた」「洗濯など、色々とお気遣いよくしてもらった」など、日々の対応に感謝の声が多くあった。



ハート
センター

近森病院薬剤部
薬剤師
萩野 佑紀

心不全療養指導士を取得し、心不全療養セミナーの講師や「心不全の呼吸困難に対する緩和ケア」の作成、保険薬局や病棟薬剤師への啓発と連携により心不全悪化の防止に努めるなど、チームの一員として積極的に活動してくれた。



ハート
センター

近森病院
地域医療
連携センター
ソーシャルワーカー
山下 佑三

患者情報をいち早くキャッチし、治療前後に予測される状況や環境などを踏まえ、退院支援に向け、いつも患者に寄り添った対応を心がけている姿は素晴らしく、また周囲への刺激となっている。



リレーエッセイ



心のリフレッシュ

近森病院 北館2階病棟 看護師

宮崎 永遠

みやざき とわ



紅葉の秋を迎えました。最近ではコロナ下で外出する頻度が減り家で過ごすことが一番多い年になりました。そんな中で、最近友人に誘われ、別府峡に紅葉を見に行ってきました。普段は、紅葉はおろか自然にも興味のない無頓着な人生を送ってきました。

普段の日だったので、人も少なくゆっくりと過ごすことができ、心のリフレッシュになりました。自然には心と体に物理的に働きかけ自律神経を安静モードにし、リラックスさせる効果があるそうです。コロナ下でいろんなことに制限がかかり、ストレスが多い今だからこそ、普段の生活では気づけない、充実した休日を送ることができました。

紅葉の次は、高知県にはいろいろな滝があるようなので、それを楽しみに仕事も頑張っていきたいと思ったりもしています。

今は、コロナで、旅行に行ったりすることが出来ず、僕のように趣味がないひとほど、しんどくなる世の中だと思います。もし、1日でもゆっくりできる休日があれば、ぜひ紅葉や自然に触れた休日を送ってみてください。

皆さんの休日が少しでも充実した時間になりますように。



私の趣味

あらゆる釣りを広く浅く

株式会社 シーメック

池田 幸弘さん

いけだ ゆきひろ



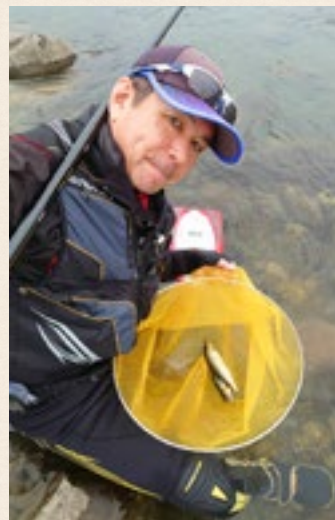
私の趣味といえるものは唯一釣りくらいでしょうか。釣った魚を捌いて刺身などにし、美味しいと喜んでもらえるまでを楽しんでいます。美味しい持ち帰りがあるので家族からも許容されて(あきれられて?!)いるかと思っています。

あらゆる釣りを広く浅くしますが5月から9月はほぼ鮎釣りです。

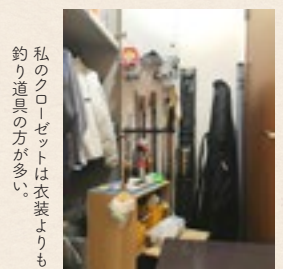
社会人なりたての頃、実家福井県大野天空の城の下、九頭竜川でおじさんに教わり、高知に来てからも数年やっていました。その後、11年間のブランク。数年前に一緒にやらないかと声を掛けていただき、重たかった腰を再び上げる事にしました。子供も手が離れてきたので毎週のように自宅から近い物部川や遠く四万十川へ仲間と、あるいは一人で夏場の川遊びを楽しんでいます。

その他は海へ。アジ、タイ、イカ、タチウオなどシーズンのものを狙います。

ありがたい事に、釣りを通じての職場、院内など共通の繋がりもでき、趣味共に大事にしていきたいと思っています。



炭火焼きにしていただきました。



私のクローゼットは衣装よりも釣り道具の方が多い。

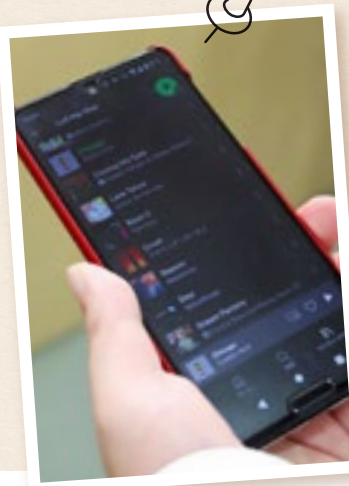
私の1枚

音楽紹介

診療支援部
電子カルテ管理課

中村 亮太

なかむら りょうた



音楽が好きで工作中以外はほぼ何かしらを聞いています。様々なジャンルに興味がありますが、Lo-fi Hip Hopというジャンルを紹介しますが、Lofiとは録音手法の1つであり、あえて音質を下げ、古いレコードのような雰囲気になります。その手法がHipHopに応用されるようになったのはNujabesという日本人がルーツだと言われています。あまりうるさくなく、他の作業の邪魔になりにくい音楽ですので、触れたことが無い方はぜひYouTube、Spotify等で検索してみてください。

退職

ごあいさつ

臨床検査部 技師長 **今村 初子**

いまむら はつこ

在職 1978.4.13~2021.12.8(非常勤で現在も活躍中)

乗り切って“目指す検査部”になりました

1978年4月に入職し約44年、技師長となり33年、近森病院開設75周年『理事長への質問の回答』には、懐かしい風景や記事があります。

1964年に当院が「救急告示病院」に指定され、「検査開設」となり、当初は技師1名でスタートし57年となります。1975年から時間外検査(21時まで)を開始し入職時に技師11名となり、他の医療機関に先駆け24時間体制となりました。

主な業務は生化学・血液検査で、輸血、心電図検査はわずが、採血は看護師が行い、患者さんに会うことはほぼありませんでした。救急車で交通外傷の患者さんが運ばれる度に、救命のために生血輸血が行われ、自動化やシステム化とは程遠い頃でした。



◀ 20年前の輸血検査室



▲ 50年目の近森会



◀ 外来病棟患者さんの検査はいつでも30分で報告

『2003年近森会の目指す方向…新たな転機』

理事長の言葉

- 医師は医師にしかできないことを
- コメディカルはそれぞれの専門職にしかできない仕事を
- スペシャリストに

10月から検体検査の一部が外注となり、技師は生理検査を拡充し、輸血、細菌、病理検査を行い“臨床”検査技師へと業務内容が変わりました。新しい分野に戸惑いながらも、採血、超音波検査(心臓・腹部)、心臓カテーテル検査、内視鏡検査、チーム医療と職域が拡大しました。

2014年8月、近森病院5カ年計画が完成し、要望の強かった心臓カテーテル・内視鏡検査の24時間体制が実現し、新本館3階フロアで働く多くの技師の姿に達成感を感じました。

方向転換して18年が経過し、総勢54名となり各自が専門性を持ち、近森会の変革について行けたのは皆様のおかげです。ありがとうございました。

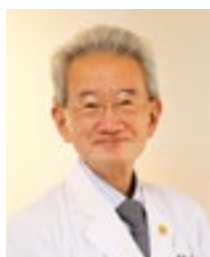


12月8日、今村技師長退職サプライズ記念会にて



50年目の近森会(1996年12月発行)

今村初子技師長 33年間本当にありがとうございました



近森病院 院長 **近森 正幸** ちかもり まさゆき

今村さんが技師として近森病院に入職された1978年は、技師11名体制でやっと24時間365日、日当直業務が開始された年でした。当直するために技師になったのではないと言って技師が辞めていたり、多発外傷で輸血用の血液が不足した時などは、ラジオやテレビで血液の提供を呼び掛け、多くの方から採血しては輸血していた時代でした。

1989年4月に技師長に就任されてから現在までの33年間は、まさに臨床検査部の成長の歴史そのもので、今村技師長が先頭に立ってみんなをまとめ作り上げてくれました。いつも笑顔でみんなに慕われていました

が、検査部の詳細な勤務表を見ても分かるように技師長としての膨大なマネジメント業務を丁寧にこなし、時代の流れに沿ったあるべき検査部を構築し、高知県で最大規模の検査部にまで発展させてくれました。

2003年には検体検査をランチラボに全面的に外部委託し、技師を計画的に増員、専門性を高め従来医師が担当していた分野の業務を次々と技師に拡大してくれました。現在では54名の技師が責任をもって検査を行っており、生理検査の心エコーではほとんどを技師が行い、輸血や細菌、病理ばかりでなく内視鏡検査室やカテ室での活動、腹部エコーも技師が実施し放射線科医師がダブルチェックを行っています。

今回、今村技師長は定年退職されますが、幸いもう少し引継ぎを兼ねて臨床検査部を見守ってくれるとのこと、技師長という肩の荷を降ろして人生を楽しんで下さい。

退職

ごあいさつ

近森病院 整形外科
統括部長

衣笠 清人

きぬがさ きよと

在職 1992.6.15~2022.3.11

近森病院での30年間、 語り尽くせぬこの思い

1992年6月、岡山大学整形外科医局からの派遣医として着任しました。1996年12月、上司の枝重恭一先生のご開業後、整形外科を任せられました。それから四半世紀もの間この場所で働き続けることになろうとは当初は思いもありませんでした。その間には楽しいこともそうでないこともたくさんありました。今となってはすべてが自分の成長の糧になっているように思えます。

着任時は500例あまりであった年間手術数を現在の2,200例以上まで増やせたこと、AO財団のフェローシップ受け入れ病院として日本で初めて認可され、外国からの研修医も二桁に上ったこと、県内外から広く多くの若い先生に研修に来ていただいていることなどは自分の誇りになっています。このように整形外科を発展させるためにいろいろとバックアップしていただいた近森正幸理事長と川添昇前管理部長には感謝の気持ちでいっぱいです。

私自身は整形外科医になって以来ずっと「手術治療を極める!」を命題に仕事を続けてきました。最近でこそ人工関節やサルベージ手術が中心になっていますが、本当にいろいろな手術をやってきました。しかしまだ道は半ば、引退には早すぎると感じています。頭と身体、目と手が動く間は現役として「生涯一外科医」として仕事をやり続けたいと思っています。幸いこういう思いを受け入れてくれる病院から声をかけていただいたので、今後はそちらで腕を振るおうかと考えています。もちろん現在のスタッフからの要請があれば喜んで応援に駆けつけるつもりですので、今後も私の顔を見かけたら笑顔で声をかけて下さいね。



1992年8月号ひろっぱ
ニューフェイスより

中四国有数の整形外科に育てて下さった 衣笠清人統括部長に感謝して

近森病院 院長 近森 正幸 ちかもり まさゆき



衣笠先生は1996年10月前任の枝重恭一部長の跡を継いで若くして整形外科科長、部長、2008年には統括部長に就任され、手術一筋に整形外科を率いてくれました。救急の外傷や難治骨折症例、さらには患者の高齢化に伴い人工関節や骨切り術などの慢性疾患に対する手術治療にも精力的に取組み、非常に丁寧な手術を実践することで、良好な長期の治療成績を反映して手術件数は就任当時の年間900件から年々増加し2,200件となり、中四国でも有数の整形外科にまで育てて下さいました。

学会発表や論文投稿を積極的に行うばかりでなく、高知県内の整形外科医とともに高知骨折研究会を開催、さらには全国の著名な先生方を招き黒潮外傷カンファレンスなどを開催し、全国から参加者が集まっています。骨折治療の世界的グループであるAO Foundationのfellowship centerに日本で初めて認定され、世界各国からも外傷の研修に訪れるまでになりました。これらの活動を積極的に行うことで、他施設から多くの研修を希望する医師を迎えることが出来るようになりました。

先生は整形外科医が手術に専念できるように、落ち着いた外来患者をかかりつけの先生方をお願いして、救急と紹介、専門外来に絞り込むという地域医療連携を1999年から近森病院で初めて実践

され、2003年の地域医療支援病院認可につなげて下さいました。さらには周術期業務を看護師ばかりでなく病棟常駐している多職種医療専門職に積極的に権限委譲し、一般病棟における周術期業務のタスクシフティングのモデルを作り上げて下さいました。

定年退職を迎え、生涯手術をする一整形外科医であり続けたいという先生の強い思いから新天地で自由に手術の腕を振るわれることになりました。幸い月1回は手術指導に近森病院に来て下さいますので、お会いできる日を楽しみにしています。





歳時記



クリスマスツリー



12月1日、近森カラーのブルーをイメージした新しいツリーがお目見えしました。



センスを問われる飾り付け! ドキドキ...



周年企画

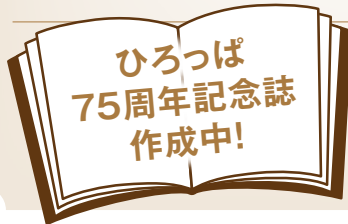


職員対象 75周年記念

近森病院開設75周年にあたる12月24日、近森会グループで働いている全スタッフへ豪華寿司弁当が配られました。



一緒に働いている関連会社の皆さんも! ▲



75周年を記念して、過去のひろっばから写真を中心に再編集し記念誌を作成予定です。あの頃は...と皆で振り返れるような懐かしの記事がたくさん、どうぞお楽しみに!



看護学校通信

オープンキャンパス開催報告

近森病院附属看護学校 主任 谷 仁美 たに ひとみ

今年度4回目のオープンキャンパスを11/7(日)に開催し、高校生13名、社会人9名の方が参加してくださいました。当日は1年生10名と教職員10名でお迎えし、あっという間の2時間半となりました。特に社会人の方からは、入学試験や学校生活、奨学金などの支援制度について最後まで積極的な質問がありました。年々、社会人の方からの問い合わせやオープンキャンパス、学校見学への参加が増えてきており、支援制度が充実していることや細やかな学生指導などが魅力的だそうです。今後も参加者に有意義な情報提供を行っていきたいと考えております。



編集室通信

ニュースに躍らされて、自転車生活を復活しました。数日は楽しいもので、近場をうろろろしていました。しかし、探しても鍵が見当たらない。それを理由に元通りの生活スタイルになっています。「きっとガソリンは下がって新年を迎えます。そして、僕のデータも下がって」と願います。

やまもり

診療数 令和3年11月

— 電子カルテ管理課 —

● 近森会グループ

外来患者数	17,921人
新入院患者数	1,139人
退院患者数	1,089人

● 近森病院(急性期)

平均在院日数	11.46日
地域医療支援病院 紹介率	90.91%
地域医療支援病院 逆紹介率	272.55%
救急車搬入件数	608件
うち入院件数	326件
手術件数	563件
うち手術室実施	368件
うち全身麻酔件数	258件

高知一の
消化器病センターを目指して、
後継者育成と地域連携に
力を注ぐ

塚田 暁

Akira Tsukada

消化器外科 部長
地域医療連携センター センター長

聞き手／ひろっぱ編集部

「NEWひろっぱルポの第一回目だからねえ、何でもお応えしますよ!」と、挨拶代わりのサービストークが編集スタッフを安堵に導く。話し方も軽やかかつ丁寧に聞き取りやすい。患者さんと接する際は、「いかにわかりやすく伝えるか」を努力しているようで、おだやかなトーンが印象的である。

生まれは東京、中学時代はニューヨークで過ごした。大学時代に当時の近森正康消化器内科部長と出会い、ペアで病院実習などを回るうちに仲良くなった。「そのうち、高知に遊びに来るようになって、ひろめ市場とかで飲んでいたので、ほら、高知の人は他人でも酒を飲むと仲良くなるでしょう。女性でもガンガン飲むのも新鮮で楽しくて」とすっかり高知家の一員に。ちなみに東京在住時の塚田医師の女性のイメージは、レモンサワーを2時間位かけて飲むイメージだったようだ。

近森病院のスタッフとも仲良くなり「一緒に



趣味は野球観戦で巨人ファン。写真は、仲良しの中岡大士科長と東京ドームでの観戦の様子(2019年8月撮影)。そのほか、余暇にはマーベル作品などの映画鑑賞を楽しむ。

働こう」みたいに誘われ「じゃあ行くか」と。はじめは週1回の非常勤勤務、その時、近森病院の多職種によるチーム医療に魅力を感じたという。「他病院では、病棟で理学療法士や管理栄養士は、ほぼ見かけませんでした。各専門職のスキルも高く、医師は医師の仕事に特化でき働きやすくて」。そうして2018年4月に近森病院の一員になった。

家族は奥様と14歳、12歳の娘さんの4人。現在は単身赴任中である。「コロナ前は月に2回ほど帰っていたね。今は便利でしょ。FaceTimeとかもあるし、レアキャラなので年頃の娘にも嫌われていないと思いますよ」と笑いつつ、「それに今が、がんばり時なので」と言葉に少しだけ熱がこもった。

近森病院には20代から80代の医師が在籍しており、塚田医師は真ん中に位置する45歳。本人も「上の世代と若手世代のギャップを埋め、折り合いをつけていくのが僕らの世代の役目」と捉えており、周りからの期待も大きい。「僕も30代までは“自分がやった方が早い”と、物事をせっかちに進めていたけれど、40代になって“人に任せる”ということが本当の意味でできるようになった」と自らを振り返りつつ、「だからね、患者さんの診療を“任せる”には、信頼に足る医師を育てないといけない。人材育成は人だけでなく、病院の成長にも繋がるし、僕らも楽になり、前向きに何かを検討する時間もできるしね」と軽快に語る。10年、20年

を見越して今が正念場と捉えているのだ。

しかし、臨床に、育成に、さらに地域連携まで担当していて、一体いつリフレッシュしているのだろうかと心配になる。「そこは人とのつながり。若手育成は趣味でもありますから」と笑う。研修医からも慕われ、単身赴任中の部屋にもたびたび遊びに来るようだ。「みんな20代だから恋愛話とかで花が咲くんですよ」と一緒に楽しんでいる。「“兄貴”とは違うかもしれない。“塚田部屋”と呼ばれていますので」と。どうやら“親方”の方だったらしく「全く遊ばれているよ」と嬉しそうに笑う。

今の目標は、近森病院の消化器病センターを消化器内科の医師とともに高知トップのセンターにすることと、地域での役割を意識した地域医療連携を充実させることだという。

モチベーションを上げるために手術中に音楽を流すのが最近のお気に入り。曲は予定時間によって4時間、6時間などに自ら編集している。BTSなどの流行歌から、80年代音楽まで、テンションの上がる曲が連なる塚田コレクションの始まりは必ず「アンパンマンマーチ」と決めている。確かに誰もが知っておりスタッフの結束に最適な曲である。「良いでしょうか?歌詞も良い。手術には愛と勇気が大切」なのだそう。

撮影場所: 地域医療連携センター

